

「チュラロンコン大学スプリングスクール 参加報告書」

京都大学法学部 4年 仲井 侑馬

私は、いままで海外とは無縁の大学生活を送ってきました。そして、チュラロンコン大学のプログラムに参加したのは、海外に対して持っていた苦手意識を克服したいと思ったからです。

今回のプログラムでは、チュラロンコン大学の学生も日本語ができたため、言語の壁に悩まされることは、あまりなく、異文化交流を心置きなくすることができました。そのため、苦手意識は、少しは薄れたと思います。

今回のプログラムで、私は、以下の3点について力を入れました。

①タイ語、タイ文化の学習

私は3時間×8コマあったタイ語学習に力を入れました。タイに来るまで、タイ語は全く習ったことがなく、文字さえも読めませんでした。なので、どのように学習するのかとても気になっており、また授業についていけるか不安でした。しかし、授業が始まると、発音記号による表記を使った学習で、実際に使う場面が多い会話が中心であったので、楽しくタイ語の基礎を習得できました。そして、学校で習ったタイ語を街中で使うことができたときの達成感は、大きかったです。

また、タイ文化の学習も興味深かったです。特に、タイの基礎知識を学ぶ授業で、日本語学習者が全国に12万人もいるということを知り、とても驚きました。しかし、日本政府による日本語学習の支援などは、あまりないと聞きました。そのような部分で、親日国を増やすという意味でも、支援はしていかなければならないのではないかと思います。

②共同発表

私の班の発表内容は「タイの広告における日本語の役割」というものでした。実際、デパートの食品売り場や化粧品売り場に出かけてみると、商品名や表示に日本語があふれていました。日本製品であれば当然なのですが、タイ製品であっても日本語が使われているものが多くあります。私達はこれが何故かに迫るべくアンケートを実施しました。その結果から、日本製品に対する高品質感から消費者の関心をひけるという答えを導きました。

私は法学部に所属していることから、ゼミで発表する際には、過去の判例を探したり、文献からの引用で資料を作ることができました。なので、今回のように、実際に現地のデパートに行き、タイの広告における日本語の使用について確かめ、そして、アンケートもするという資料作りは興味深かったです。また、現地と方と共同作業をできたことは本当にいい経験になりました。

③タイ学生との交流

日中は、主にタイ語の勉強をしていましたが、授業後は、タイの学生にバンコクの観光地や、おいしいタイ料理屋に連れて行ってもらいました。観光地では、ガイドブックには載っていないようなことも教えてもらったので、とても充実した時間を過ごすことができました。また、タイの諺や言い伝えなどの話も聞きました。日本のものと比べてみることで、文化の違いを感じ、それらは、社会の成り立ちの違いに、原因があるのではないかと考えを巡らせたのは、とても楽しかったです。

また、今回のプログラムは、私に大きな影響を与えました。今回の研修では、相手が日本語を話してくれた為、言語に不自由することなくプログラムを進めることができました。しかし、ときには伝えたいことが伝えられないこともありました。そのとき、どんなに立派なことを考えていようが、相手に伝わらなければ意味がないという、当たり前のことを再認識しました。そのため、英語の重要性を痛感しました。

4月からは社会人になりますが、大学時代に英語の勉強を怠ったことを自虐的に話のネタにするのではなく、このプログラムを通して感じた英語ができないことへの焦燥感や敗北感をバネに、英語の勉強を始めようと思いました。

今回のプログラムに参加して、可能であれば、海外の大学に留学したいと思いました。私の目標は大使館勤務です。目標は高いですが、達成できるように努力したいです。

最後になりましたが、このプログラムをつくりあげてくださった多くの方々に感謝を申し上げます。

ありがとうございました。